

「五大昔噺—江戸期よりの絵本—」展

清瀬市郷土博物館

日本では江戸時代より絵本が広く読まれ、この伝統は明治・大正・昭和へと引き継がれ、時代は変わろうとも質の高い絵本が生まれています。しかし、昭和もテレビが普及してくると、この様相は様変わりし、例えば「おとぎばなし」を知る方法は、従来は絵本によりましたが、それにとって変わりテレビを媒介としています。優れた絵本文化を有していた伝統が、今変わりつつあります。立ち止まることも振り返ることもなく受け入れる映像と、絵本とではおのずとその世界の広がりには差異があります。

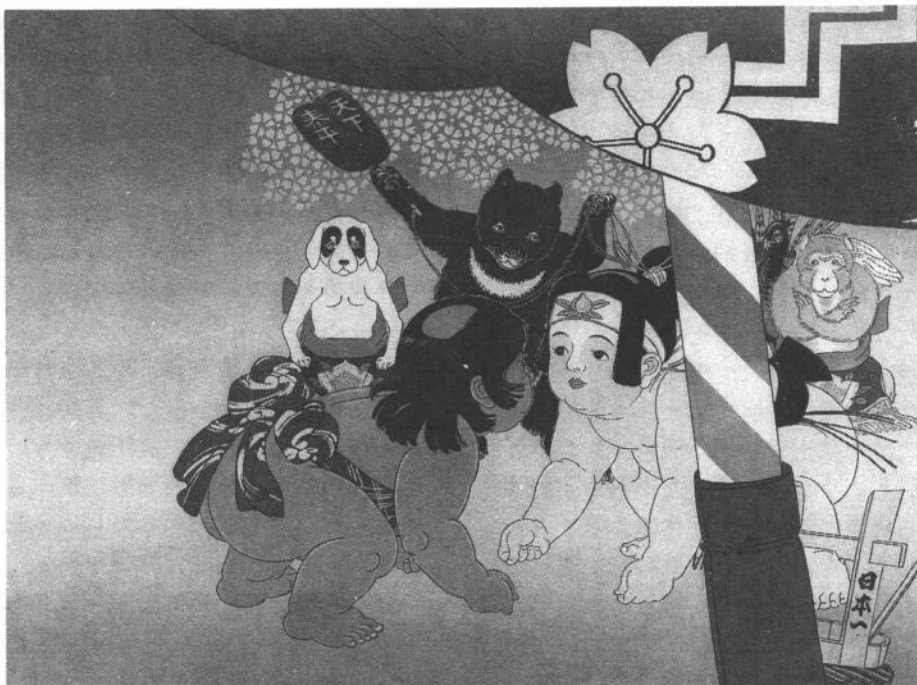
「美しい、上品な絵を見ていると、いつしか心が美しく上品になって来ます。それが絵の力なのです。絵の教育ということは、絵を教える意味ではなくて、絵の力で美しい上品な心を培ってゆくことにあるのです。」と野口雨情が言っているように、まさしく絵本には情操を育むものがあります。

このたび「五代昔噺—江戸期よりの絵本—」のテーマのもと、時代の移り変わりとともに変わりゆく形態と、登場人物の服装や語り口などその当時の流行や思想、時代背景を明らかにし、かつ、豊かな創造力を育み、感性を磨くためにも、幼児期における絵本の大切さを再認識していただければと企画しました。

さて数多く伝承されてきた昔噺のなかで、「桃太郎」、「舌切り雀」、「花咲爺さん」、「猿蟹合戦」、「かちかち山」の五つの噺がいつごろ「五大昔噺」として選ばれ、呼ばれるようになったのか。五つの噺が創りあげられたのは江戸時代後半と思われ、明治の中頃より「五大昔噺」という言葉が使われはじめています。

「江戸期よりの絵本」とのサブタイトルがあるように、日本では当時の世界では類を見ないほど出版文化華やかかなりし時代でした。多色を用いた色の表現とそれを可能にする印刷技術。どれをとってもその水準は高く、西欧絵画に与えた影響でも分かります。この出版文化が江戸から明治・大正にかけて変容してきます。どう変容したかということ、明治を境に西欧文化を積極的に取り入れ、目は外に向けられました。そのなかの一つに印刷技術もあり、時間と高度な技術を要する木版にとって変わり、活字を使った印刷となりました。原価が安く大量に出版され、広く多くの人の手に渡った功績があった反面、印刷技術は衰退していきました。

この度の展覧会では、こうした日本の貴重な文化遺産に目を向けてもらえればとの意図もあり、来観者の年齢層も幅広く、懐かしさと親しみをもって見ていただきました。



引 札 大正（一九二二〜二六）頃 二六×三七・二cm

民俗学と博物館—市民との接点からの雑記—

佐藤 広

市町村の公立博物館は、民俗学の最前線である。最前線とは「敵側に一番近いところにある陣地」（『新明解国語辞典』）ということで、敵とは穏やかではないが、博物館が日常的かつ継続的にある種の緊張関係を持って市民（利用者）に接している動的な組織であるから。

最前線は敵が具体的によく見えるところであるし、逆に敵からもよく見えるところである。したがって、一般の人々にとって今日の民俗学のイメージは、博物館によってつくられるといっても過言ではないかもしれない。人間性を出して本音でやるしかない、飾ってもすぐにばれてしまう興味深いところが博物館である。

では、まとまてはいないが市民との接点で気付いたこと、考えていることについて触れてみたい。まず、寄付のことから。幸い市民は国や都や県の博物館より、普段着で市町村の博物館を利用する。その具体例は、民俗資料の寄付に表われる。公の市役所にもものを寄付するという心意が働き、事前に選択があって寄附したいのですがという連絡がある。だから晴れ着は収集できても、何の働きかけもしなかったら、仕事着など収集できない。でも、国や都の機関に比べたら比較にならないほど気軽に考えて寄付して下さる。具体的には「家や物置きを壊したから」、あるいは「主人が亡くなったので」と寄付の連絡がある。

まだ、実際に統計を取ったわけではないが、寄付という局面にはものの死や、人の死と接している。ただ、民俗資料の場合、その死の周辺にはそのものや人に関わりをもって生きている人々が存在する。つまりそれは裏返せば、まさに人が生きるということそのものであり、人間にとってどこかで誰でも必ず出会う事象なのである。民俗学にとって、見過ごしてはならない課題が「寄付行為」にあるのではないだろうか。そんな思いがして、私は寄付の事務書類の「経過」という欄を意識して記入している。私自身がその記述を資料として使用しないかもしれないが、将来誰かが活用する機会があるのではないかと勝手に考えている。

さて、頭だけでなく、体を使って市民に接しなければならない点もまた博物館は民俗学にとって最前線なのである。先日、清瀬市郷土博物館の伝承スタジオで、学芸員が打ったおいしいウドンを頂きながらそう思った。体験学習で自ら実際に民俗技術を体験することも、フィールドを歩き回るのも、伝承者と継続的に関わるのも（一般の民俗研究では、研究者が望むときにのみ伝承者に出会う。しかし、市町村の博物館においては伝承者の意志で研究者に出会う機会がしばしばある。

このことは重要な点である。）、資料を自分の手で一つ一つ整理していくのも、身体を使って五感で民俗を認識していくのである。

そうした地平からは、新しいというよりか生活する人々を視野に入れた本来の民俗学が誕生するのではないだろうか。

では次に収集のこと。資料収集ではどの博物館でも収蔵庫がいっぱいで、収集方法や考え方を学問的に再考する時期ではないだろうか。同じものは収集しない。ということもあり、事実、私自身もそう言っていくつかの寄付を断っているが、さて「同じ」ということを、正面から問う必要がある。郷土資料館に働き始めたころ、国立史料館や奈良県立民俗博物館の収蔵庫にはいったときの思いは忘れられない。同じ民具が多数収蔵されており、同様な民具の比較研究が必要なことを知らせてくれた。

各博物館相互で組織的な資料交換も考えてもよいのではないだろうか。八王子では土地柄、手機の寄付を受ける機会が多いが、収蔵には限界がある。他の博物館で活用できればそちらに寄付してもらう手もある。

最後に体験学習のこと。体験学習は、一般の人々を楽しみながら博物館や民俗の世界に引き付ける役割を果たし、たいへん効果のある普及活動である。ただ、民俗技術のあった時代や社会と切り離された技術を体験することは、楽しいけれども本質を突いてはいない。ある八王子市内の農家の方は、民具を調査に来た民俗学専攻の学生が麦刈りをしたいと申し出たので、家の裏の畑全部の刈り取りを一人ですようお願いしたという。結局その学生は麦を刈りきることはできなかった。でも、その学生は思いがけずに麦刈りの意味を知ったと思う。明治時代の娘たちが市日までにと機を織るのと、体験学習で織るのとでは根本的に異なっている。なにも当時と同じ労働をさせなければならないというのではなく、民俗学としてその技術についての時代背景をも含めた記録を作成すべきであろうと考える。

こんなこともあった、正月のお飾り作りで農家の方数人に講師をお願いした。当初は各家ごとの個性ある締め飾りであったが、数年続けていくと次第に受講者に人気のある締め飾りの形に統一されていった。本来家ごとに、第三者の関与無しに行われてきた伝統的技術を、公の場に出した結果である。

以上、思いついたことを記してみた。

（さとう ひろし：八王子市郷土資料館）

歴史博物館の固有の機能—「江戸東京博物館」を考える—

小泉弓子

3月のとある日、私は、新宿の小田急百貨店でひらかれていた「お江戸八百八町地下探検 東京の遺跡展」(東京都教育委員会主催)を参観した。その日は日曜日の午後、しかも約6万人が訪れたという新都庁舎の一般公開初日に重なったためでもあろうか、大変な盛況ぶりだった。人いきれのするギャラリで、文字通りようやく垣間見えた江戸の遺物たちとの出会いの感慨もさることながら、この数年来の「江戸ブーム」を改めて実感し、会場を後にした。

近年の「江戸」あるいは「江戸東京」への関心の高まりは、大都市東京に住み、またそれに何らかのかたちで日々接している人々が、とうに喪われたと思っていた、ある種のノスタルジアをともなう生活実感を過去のなかに意外に発見したことに対する驚きのあらわれとして理解できよう。歴史博物館に引きつけていささか強引に述べれば、建設ブームの続く博物館に注がれる行政のまなざしは、過去の生活や文化のありさまを具体的な事物を通して追体験したいという住民の歴史意識に導かれるところが大きいと私は考えている。

江戸東京博物館の建設もまた、「生活の記録の集積庫」として、東京の失われゆく文化遺産を保存・継承することをそのひとつの目的としている。近年の開発の中で破壊と散逸の著しい都内各地の文化財・生活資料の調査・収集・保存のための総合的な機関として同館が建設されることについて、異議を唱えるつもりはない。しかし、これまでの準備過程を博物館の外側から見てきたものの一人として、私は同館の計画にいくつかの疑問をもっている。一年後に開館をひかえ、江戸東京博物館はいま大詰めの段階に来ていることだろう。しかし、同館が本当の意味で都民にひらかれ、その共有の財産となるかどうかは、むしろ今後の課題として残されているように思えてならないのである。

江戸東京博物館の構想は、その当初から、都知事の諮問を受けた審議会において練られてきた。学識経験者、専門家によるプランづくりが必要不可欠であるとはいえ、こうした審議会方式にはどうしてもある種の閉鎖性、密室性がともなう。審議会の外にいる個人や団体の意見は、審議会の答申(報告書)が公表された後にはじめて述べられることになるが、そのときには計画が行政のベースですでに進行し、現実にならぬ準備過程に反映されることは難しいのである。私の所属する歴史科学協議会など歴史研究・歴史教育関係者からなる6団体は、同館の計画についてこれまでに情報の公開を求め、提言をおこない、そのうちいくつかは建設側に受け入れられたのだが、それは6団体がいわば束になって、しかも粘り強くつづけた結果ようやく

く得られたものである。また、江戸東京博物館は生活文化局主掌、博物館法に基づかない博物館として計画が進められてきているわけであるが、そのさいに、これまでの歴史博物館の活動の経験の蓄積がどのような形で活かされているのだろうか、既存の機関との関係はどのようになっているのだろうか。曖昧な点は依然として多い。

江戸東京博物館は、博物館というよりはむしろアミューズメント施設としてみた方が適当ではないか、というのが私のこれまでの印象である。約8600㎡の広大な展示室に日本橋や芝居小屋、銀座煉瓦街などの大型模型が立ち並び、ボタンを押せば映像が映し出され、たとえば祭り囃子の音も聞こえる。大小のホールではイベントが繰り広げられる。私は博物館がだれでも気軽に遊びに行けるアミューズメント施設としての性格をもつことを否定するわけではないが、やはり、歴史博物館としての固有の機能を果たすことを第一義においてほしいと思う。東京都立の総合博物館として、都民の税金をふくめた巨額の資金を投じて建設されるのであるから、なおさらである。

歴史博物館としての固有の機能とは、参観者が「もの」をとおして歴史を知り、考える場を提供することであり、また、その「もの」を収集し、保存し、研究する、その作業を通じて歴史を叙述することであると私は考えている。江戸東京博物館の当初の展示構想にあったように、「明治東京劇場」のなかで市電を走らせることが東京の近代を叙述する、学ぶことにはならないし、B29の爆音を轟かせることが15年戦争を語りそれを知ることにはならないのであって、着実な歴史研究、資料研究に裏付けられた展示こそが参観者に考える素材を提供するのであり、それができるのが、ほかならぬ博物館であると。

今日、地方自治体や国家はなぜ文化政策に重きをおくようになったのかという現代史研究の立場から江戸東京博物館について考え始めた私ではあるが、その間、博物館について、いろいろ勉強する機会にめぐりあうことができた。主に文献史料を素材とした歴史研究、歴史叙述の枠組と博物館における歴史研究、展示とはどのようにして相互に関連しあうのか、等々、まだまだ宿題として残されているが、いずれ機会をみつけて考えを述べたいと思う。なお、小稿で十分に述べきれなかった論点について、上述した6団体の江戸東京博物館の建設計画にたいする提言活動の経緯を辿りながらまとめたことがあるので(『歴史評論』490号、91年2月)、参照していただければ幸いである。

(こいずみ ゆみこ：歴史科学協議会)

平成2年度の活動から

東村山市立郷土館

当郷土館は展示面積100㎡程の小規模館で、館活動は大きく制約されています。そこで公民館や北山公園民家園を利用して特別展示の工夫をしています。

そうした中で「こども歴史教室」は18年続く息の長い事業となっています。当初は市報公募で百数十名の応募がありましたが、現在は各小学校からの推せんで50名程の学級生です。

土曜日の午後を利用した全8回の教室で、内容は先ず東村山の歴史や地理の特徴を学び、次にそれを年表化し地域の歴史を日本史の中で理解します。

そのうえで市内の文化財を足で歩き、歴史と文化財を生きた身近なものとしています。

すでに数百名の児童を送り出したこととなりますが、この子供たちが文化財活動の裾野を大きく広げてくれることを願っています。



府中市郷土の森博物館

平成2年4月に移動天文観測車「ベガサス」を導入し、天文普及活動の一環として、市内各所に出向き移動星空観測会を実施した。また、毎月一回郷土の森園内にて星空観測会を実施し、一般に対する天文普及活動を行った。

7月には特別展「ミクロの世界」を開催し、顕微鏡の変遷、顕微鏡で実際に覗いたミクロの世界などを展示し、目に見えない世界を紹介した。9月には、当館で所蔵している岩石（芦田コレクション）標本を中心に岩石展を開催した。平成3年2月には全国の天神人形を約300点集めた企画展「郷土の人形—天神さまあ・ら・か・る・と—」を開催した。3月には六所宮神主の猿渡盛章をはじめ、いく人かが残した紀行文や道中日記を展示し当時の人々の旅を追体験する特別展「伊勢へ、奈良へ—幕末の旅と社会—」を開催する。



八王子市郷土資料館

1990年は、八王子開市400年に当たることから、これに因んで「北条氏照と八王子城」（会期：7月22日～9月5日）・「八王子千人同心」（会期：10月16日～11月25日）の二回の特別展を開催した。前者は、氏照関係文書や八王子城の出土遺物を素材として、改めて北条氏照と八王子城をめぐる諸問題を考えなおしてみようという企画であった。

また、後者は、天正18年（1590）、八王子城が落城し、八王子城を含む多摩地域が徳川氏の直轄地になると同時に八王子に配備された、八王子千人同心の足跡を通して、近世八王子の歴史を考えようという企画であった。

天正18年（1590）は、多摩地域にとっても、大きな歴史的節目である。後北条氏の滅亡により、新たな支配関係が生まれ、中世から近世へと時代が変化していくからである。それだけに、この激動期に対する市民的な関心は高かったように思う。

しかし、その一方で、こうした問題についての基礎的な研究成果が、まだまだ乏しいことも実感された。地域史研究を増進させていく上でも、地域博物館に要請されている課題はつきないようである。

町田市立博物館

一粋な透かし—赤坂鐺（4月3日～5月6日）

江戸初期から江戸赤坂で造られた透し鐺140点を展示。

佐野美術館の名刀（同上）

重要文化財4点を含め、正宗他の名刀9点を紹介。

田端東遺跡展（5月15日～7月8日）

田端東遺跡発掘調査報告として土器石器130点を展示。

ボヘミアン・グラス—18世紀～20世紀—

18世紀以降の館蔵ボヘミアン・グラス48点を展示。

武蔵の塔婆（7月17日～8月26日）

武蔵地域の石造・木造等の塔婆30点、板碑45点を展示。

インドシナ半島の陶磁器（9月4日～10月14日）

近年発掘され話題となった白釉緑絵陶器他568点展示。

オリエントのガラス（10月23日～12月2日）

ローマン・ササン・イスラムガラス300点を展示。

大津絵（12月11日～1月20日）

当館所蔵の大津絵42点を中心に、初期仏画他55点展示。

民具と生活（1月29日～4月7日）

町田で使用されてきた民具を衣食住、生産に分け紹介。

東海道五十三次漫画絵巻（1月29日～3月3日）

田河水泡氏寄贈コレクションの内漫画絵巻55点を展示。

多摩の民俗—養蚕信仰—（3月5日～4月7日）

多摩地域の養蚕信仰に関する神仏像・掛軸等51点展示。

青梅市郷土博物館

文人小林天淵展 2.7.25～2.12.28

小林天淵は、江戸時代後期における青梅の生んだすぐれた文化人である。

詩文・俳諧・狂歌を始めとする多彩な文芸活動の中で彼がとくにその才能を発揮したのは、画業においてである。『青梅文晁』とも称された、天淵一代の作品を一堂に集め展示、紹介する。

丸山遺跡とその時代展 3.1.4～3.3.31

丸山遺跡は、青梅東部の台地上にある、旧石器時代から平安時代にかけての遺跡である。

これまで4次にわたる発掘調査によって旧石器時代の石器製作跡、縄文時代中期の集落跡、古墳時代後期の集落跡、平安時代の住居跡などの遺構から莫大な量の遺物が出土した。それらの調査結果にもとづき、丸山遺跡とその時代について展示・紹介する。



瑞穂町郷土資料館

本年度は前年文化祭に「瑞穂の民俗・年中行事」展を実施し、これを一年間公開することにしたので、4月当初より引続き年中行事を展示した。展示期間は10月末までとし、恒例の文化祭参加特別展は「我が家のたからもの展」を実施した。この企画は、過去2回開催されていて、5年おきに行われてきている。この展示は毎年実施される町の文化祭に合わせて、文化の日をはさみ3日間公開するもので、町民から「先祖より伝わる職業道具や生活民具、古い写真、絵画、古文書など」を出展依頼し、文化財審議委員が借用に歩いて集めた。

この「たからもの」の意味は、「我が家にとってかけがえのない」宝物のことで、総数98点を展示することができた。この特別展に続いて、「その後の収蔵資料展」を開いているが、最近寄贈された郷土資料等を公開することにしたものである。

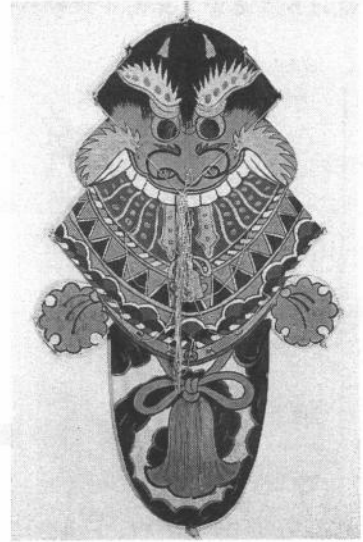
行事としては、「郷土歴史講演会」を平成3年1月13日、町の新設間もないスカイホールで行った。講演は文化財保護審議会の吉川委員による「秣場と浅間社の争論」と村山委員の「町史の裏話・村でおこったできごと」の二つであった。聴講の町民は60名を越え、盛会であった。

調布市郷土博物館

加藤文成（郷土玩具）コレクション

平成2年9月、郷土玩具コレクションとしては日本でも屈指の個人コレクションといわれる加藤文成コレクションの寄贈を受けた。目下寄贈資料の整理を進めており、その全容を把握するまでには至っていないが、数千点にのぼる資料の中には地元でも見られなくなってしまった貴重な資料が多数含まれている。また内容は羽子板、独楽、凧、首人形、木馬、姉様人形等々をはじめ実に多岐にわたり、戦前・戦後を通じて60年に及んだ収集成果の質と量にただただ圧倒されるばかりである。

展示公開については、平成2年10月から約2か月特別展を開催し、その一端を公開した。また今後についても整理作業の進捗状況に合わせて順次展示を企画し、公開に努めたいと考えている。



奥多摩郷土資料館

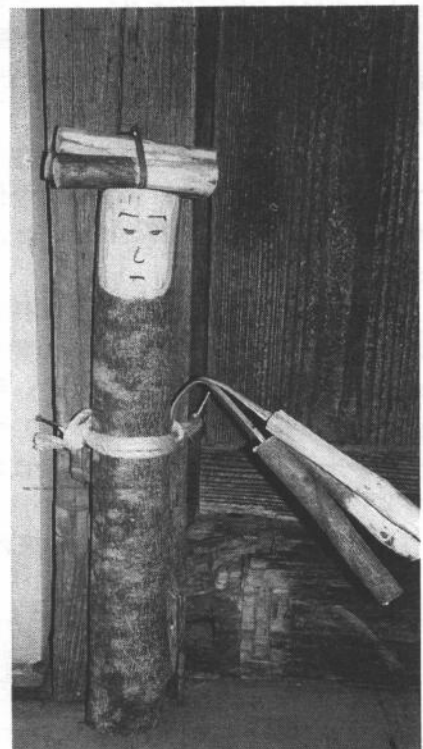
収蔵品展（2階）

2.4～3.3 小河内の山村生活用具（国指定）を中心に展示。

3.1.13～1.31 小展示替：小正月飾りの門棒、まゆ玉飾り。

小河内の郷土芸能
2.4～3.3 水没した小河内地区に伝承されていた鹿島踊、車人形、獅子舞、神楽を展示。

ささら獅子舞展示
2.9～3.3 奥多摩に数多く伝承されている「ささら獅子舞」の中から氷川、小留浦の獅子舞を展示。



福生市郷土資料室

「ちりめん本と草双紙—19世紀後半日本の絵入本—」

平成2年度の特別展示として陳列した「ちりめん本」は、まだ一般に馴染みの薄い図書のひとつと言えます。しかし、身近な日本の昔噺や古典文学を題材に表紙や挿絵に伝統的な色彩木版画を取り入れた縮緬本は、観る者に強烈な印象を与えるばかりでなく、明治初期に日本の出版社が英国の出版社と共同で刊行したこと、英語、独語、仏語など数か国語に翻訳され、翻訳にはラフカディオハーンやバジルホールチェンバレンなどが携わっていたことなど、研究者にとっては注目すべき点の多い資料です。

■講演会 展示にあわせて、アン・ヘリング法政大学教授による講演会「縮緬本と日本昔噺」を開催しました。

■解説書 B5、44頁、展示資料67点全てを紹介した展示図録を刊行しました。

▶「桃太郎(英文)」(表紙) 明治19年



武蔵村山市立歴史民俗資料館

新刊紹介

武蔵村山市文化財資料集 八

「武蔵村山の昔がたり」

—村山ことばによる口頭伝承—

本書は市内に伝わる口頭伝承をさし絵、写真をまじえて121話紹介しています。内容は伝説・昔話、民間信仰、昔の話・昔の生活にわたるもので、お年寄りの話す「村山ことば」を生かした形の表現になっています。

口頭伝承を含めた民俗事例の調査は、昭和59年より文化財専門委員及び市内の研究グループ「武蔵村山郷土の会」によって進められてきました。一時は多くの難問をかかえ、成果の発表が危ぶまれるほどでした。

しかし、お話を伺った百余名のお年寄りに「一刻も早く成果をお見せしたい」という関係者一同の強い熱意に支えられ、今回の発刊にこぎつけました。

来年度には年中行事、農作業、遊びなどを収録する続編を刊行する予定です。



五日市町郷土館

改訂本紹介 「化石は語る 五日市むかしむかし」

古くて奇妙なもの—パレオパラドキシア—

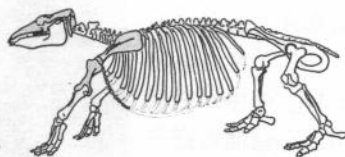
1989年3月26日 秋川橋下流の川原で、増戸小学校自然観察クラブの児童達が、動物の牙と骨の化石らしい石のかたまりを見つけました。

この石の固まりをよく見ると小指ほどの歯がのぞいていて、デスマスチルス類の動物の化石とわかりましたが、まわりの石をはがしてみると、パレオパラドキシアの頭蓋骨でした。

このパレオパラドキシアは、体長3mほどで、カバのように主に水中で生活し、木の葉や草、海草、ときには貝なども食べていたようです。新生代第三紀中新世の中頃現れて、こつ然と姿を消してしまった動物です。また、この仲間には現生動物には見当たらず、化石として知られているのみです。

パレオパラドキシアの名の由来は、ギリシア語で

「パレオ」古い、「パラドックス」奇妙な、という言葉から名づけられたものです。また、この頭蓋骨が発見されたのは、世界で五例目です。



パレオパラドキシア骨格復元図 (大塚剛久氏原図) (□は今回発見部分)

羽村町郷土博物館

講座「はむら自然観察会」

平成2年5月26日、7月29日、10月27日、12月1日、平成3年2月17日

羽村町内に生息する野鳥や植物を、初心者向けに観察会を実施。多摩川周辺や草花丘陵の観察が中心であった。また、御岳方面にも出かけて、観察会を実施した。

夏休み歴史相談室

平成2年7月26日、27日、8月23日、24日

羽村町の歴史や自然について調べる方法などをアドバイスした。一人一人から疑問点を聞き助言を行った。

特別展「玉川上水—古絵図と測量」

平成2年10月16日～12月2日

玉川上水の工事方法は、具体的に解明されていません。そこで、特別展では江戸時代の測量技術を通して、その謎に迫った。また、あわせて玉川上水の古絵図も展示した。

玉川上水シンポジウムの開催

平成3年2月23日

玉川上水の謎にせまるをテーマに、玉川上水路考や江戸市中におけるその機能と構造、測量方法、玉川上水の意義等を各パネラーに発表していただき、シンポジウムを開催した。

清瀬市郷土博物館

●特別展「倉田三郎・風景との対話」(平成2年4/28～5/13) 武蔵野の風景を主題とした作品を中心に、春陽会の重鎮倉田三郎氏の描く油彩画・素描画など67点を展示。●特別展「五大昔噺—江戸期よりの絵本一」(2年9/22～10/10) 江戸時代から昭和までの絵本と双六等の出版物を紹介し、その表現方法や印刷技術の変遷を見る。●企画展「清瀬美術家展」(2年11/10～11/25) 清瀬美術家懇話会作家25名と招待作家3名の絵画・彫刻を展示。●歴史展示室テーマ展示「開墾、そして戦乱の時代へ—清瀬の古代から中世—」(2年11/13～3年10/31) 市域で発掘された土器や板碑などの資料をもとに、古代から中世にかけての清瀬の様相を探る。●民俗展示室テーマ展示「清瀬に生きる講の世界」(3年2/17～4年3月) 講を、祈る・つどう・旅の3つの観点からとらえ、写真、法具、生活用具などで清瀬に残る講の姿を紹介。●博物館年中行事 年間を通して、粟穂・稗穂、まゆ玉、茶つみと茶もみなど清瀬の人々が営んできた行事や仕事を再現する。●先人の知恵に学ぶ 各地の郷土料理、機織り、藍染め、和裁、藁草履作り、しめ縄作り、宿泊体験学習(市内小学3年生対象)の各講座を置き、参加者に体験的に学んでもらう。●刊行物「清瀬の史跡散歩」(2年11月)を新たに発行。

立川市歴史民俗資料館

平成2年度は、資料館の増築工事や市制50周年記念の『写真集たちかわ』の出版などの事業があったため、例年開催していた特別展や体験学習会は行わなかった。ただ、古文書講座(6～7月の土曜日午後、連続5回)と写真展『立川の今昔』(12月～1月)を実施した。

増築工事は、平成2年8月に着工され、本年5月完成を目指し、順調に進められている。増築部分は、鉄筋コンクリート造り2階建て、延床面積約700㎡である。1階は、会議室、図書資料室、学習室、体験学習室など。体験学習室は、畳の部屋・板の間・土間からなり、機織りや手打ちうどん作りなどの事業を行う予定である。2階は、大部分が収蔵庫で、写真撮影室なども設置される。

この増築部分と既存部分とは、2階を渡り廊下で連絡する。既存部分にある2つの収蔵庫と新しく造られる収蔵庫を効率的に活用するためである。

また、今回の増築工事の中で、既存の講座室を特別展示室に改修することが計画されている。

今回の工事により、総延床面積は、約1,700㎡となり、展示をはじめ、資料の収集や体験学習会の開催など、さまざまな事業の展開が予定されている。

檜原村郷土資料館

檜原村昆虫展 6.10～8.30

長年に亘り採集した昆虫を展示し夏休みの展示会を開く。

檜原村郷土芸能の写真展 9.3～12.25

各地域に於ける祭にまじわる生活に関するものを集めての展示。

日本の滝100選ポスター展 2.10～3.25

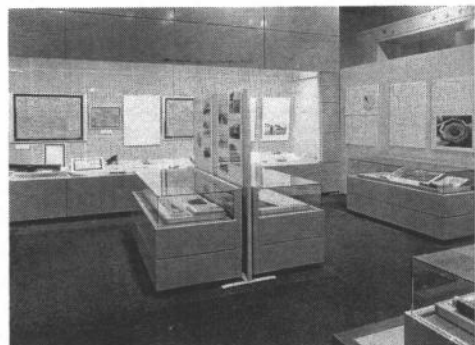
百選に選ばれた檜原村の佛沢の滝祭と共に全国の滝のポスターを一堂に集めて展示をした。

マルチスライド製作

第2本目で、3月中完成の予定「檜原村物語り」内容は民話と歴史を中心にしたもの。

日野市ふるさと博物館

当館では初の企画展・「鉄道の時代」—鉄道の発達と日野一を、平成2年7月21日～8月30日の期間で公開した。昨年1月、中央線日野駅が開業百周年を迎えたのを記念して、日頃は無意識の内に利用している駅や鉄道の歴史を、広く市民の方々に知って戴く目的から、市内を走る二つの鉄道(中央線と京王線)を対象を絞り、歴史史料、写真資料、体験談、鉄道模型、AV資料、子供たちが描いた鉄道の絵などを交えてその過去を紐解き、併せて、現在から未来への展望という形で展示をまとめた。なお期間中、子供の絵の一部は日野駅コンコースに展示され、通勤客の目を楽しませることとなった。



国立市郷土文化施設担当

(仮称) 郷土文化施設の開設に向けて

武蔵野の面影を残す谷保山南養寺の雑木林を背景に、(仮称) 国立市郷土文化施設の建設は計画されました。敷地面積約3,600㎡、述べ床面積約2,100㎡の規模。展示室、収蔵庫、講堂など施設の大部分を地下に配置し、地上にはエントランスホール、研修室などわずかな部分を配置するだけで、多目的広場として活用される、一見風変わりな建物です。基本設計は平成元年度中にできており、2年度は建設用地の取得に取り組み、めどが立ちました。そして、3年度には、いよいよ実施設計と展示設計に着手する予定で、一步一步実現に向けて進行しています。

2年度は、市内に残された江戸時代からの農家を城山園内に移築復元しました。茅葺き、入母屋造りで、ウマヤのある広間型の民家です。今秋までには外構整備を済ませ、一般公開する予定です。



復元工事中の旧柳澤家主屋

東京農工大学工学部付属繊維博物館

<展示会>

- | | | |
|----|----------------|---------------|
| 1 | わら工芸展 | 2/16~4/30 |
| 2 | 千代紙・古典折り紙展 | 5/16~6/12 |
| 3 | 特別展「浮世絵にみる蚕糸業」 | 5/23~5/27 |
| 4 | 草木染め組紐コレクション展 | 6/13~7/15 |
| 5 | 大正期の呉服地展 | 7/16~8/30 |
| 6 | テキスタイルデザイン展VII | 9/6~9/20 |
| 7 | 藍に色を重ねて | 10/25~11/13 |
| 8 | 特別展「科学技術展IV」 | 10/25~10/28 |
| 9 | 収蔵品展・紙による工芸展 | 11/30~12/25 |
| 10 | 土山コレクション・組ひも展 | '91 1/11~3/30 |
| 11 | 第10回サークル作品展 | 2/12~2/18 |

<講演・講習会・催し物>

- | | | | |
|---|--------------|---------|----------|
| 1 | 講演会「紙の宝石」 | 谷 喬 | 5/7 |
| 2 | 〃 「浮世絵と養蚕業」 | 金子六郎 | 5/26 |
| 3 | 講習会「鯉のぼりはり絵」 | 和紙はりえ会 | 4/25 |
| 4 | 〃 「結びの壁飾り」 | ひも結び研究会 | 9/11 |
| 5 | 〃 「草木染クッション」 | 手紡ぎ研究会 | 11/8 |
| 6 | 〃 「シュロで作るカゴ」 | 紬瑠かご会 | 11/26 |
| 7 | 催し物「たなばた祭」 | | 7/7 |
| 8 | 〃 「まゆ玉祭」 | | '91 1/14 |

東京都高尾自然科学博物館

高尾山を中心とした東京の自然についての常設展示のほか主催事業として、

自然観察会を4月スマレ、5月新緑の森、7月溪流の虫、10月キクの仲間、11月もみじ、12月高尾山の地質と地形、2月ナガレタゴガエル、の7回実施し、延393名の参加があった。

自然講座(於講堂)6月水生昆虫、8月都市の生きもの、9月東京の地学、1月多摩の動物、3月多摩の植物、の5回開催し、延250名の参加があった。

出版物については、研究報告第14号(多摩御陵の植物)B5 600部、東京都の自然第17号(A5)1000部を3月中に発行する。



編集後記

今号は少し内容を変え加盟各館の状況をお知らせするとともに外部からも原稿をいただき編集しました(五)。佐藤氏の論文で、「身体を使って五感で民俗を」の提言に、同感と先途の不安がつる(羽)。近年、歴史学会では博物館への関心が高まり、歴史展示、叙述等々について様々な論議がなされています(福)。三博協加入館の増加のため、従来どおりの紙面数では活動報告はそろそろ限界ではないでしょうか(武)。会員館である東京都武蔵野郷土館は江戸東京博物館の野外展示施設として開設準備のため、平成3年度閉館致します。

発行：東京都三多摩公立博物館協議会

〒204 清瀬市上清戸2-6-41

清瀬市郷土博物館内

☎(0424)93-8585

編集委員：五日市町郷土館

羽村町郷土博物館

福生市郷土資料室

武蔵村山市立歴史民俗資料館

印刷：三協美術印刷株式会社